

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Comparison of the Kyoto dialect with the Osaka dialect--Noda, honorifics, negation, citation, verbal ending and archaic dialect--

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中井, 幸比古, Nakai, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1816

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



京阪方言の比較

——「のだ」、敬語、否定、引用の「と」、語尾のス・ル、擬古方言——

中 井 幸比古

1. はじめに

1.1 京阪方言の比較について

京都方言と大阪方言（京都市・大阪市の旧市街地の方言をさす）の相違点と相互の史的関係について、いくつかの文法形式を対象として論じる。時期は明治以降に限る。資料が一定量揃う最古の世代である明治後半～大正初年頃生を中心とし、それより上・下の世代の方言をも扱う。語形の変異を中心とするが、音調や意味用法についても述べる。このテーマについては古く榎垣（1948）があるが、今では付加すべきことも多い。

1.2 資料

資料として、映画のシナリオ、小説の会話、随筆、落語速記の、京阪方言の部分を用いる。本稿で扱う主な資料は以下の①～③である。①に重点を置く。

① 依田義賢の映画のシナリオ——『祇園の姉妹』と『浪華哀歌』——

依田義賢作のシナリオから、『祇園^{きょうだい}の姉妹』（以下『祇』）と『浪華^{エレジー}悲歌』（以下『浪』）を取り上げる。2 作品とも 1936 年封切で台詞の分量もほぼ同じ。前者は京都方言、後者は大阪方言が現れる。

岸松雄 1957「シナリオ作家銘々伝（十） 依田義賢」『シナリオ』13-1 によると、依田は 1909 年京都市生で現京都市中京区育ち。父は兵庫県出石出身だが若年より京都在住、義賢の小学校卒業の前年に死去。母は、依田（1980）「京の暮れから正月」『言語生活』1980 年 1 月号によれば京都育ち。

戦前の京都方言の資料は文学作品の会話が主だが、ネイティブが書いたものは殆どなく（中井 2008a）、そこに現れる方言が現実と一致するか常に不安がつきまとう。そんな中で依田のものはネイティブによる戦前期のほぼ唯一の作品である。大阪は戦前から資料が多くあり、依田作品による必要性は高くないが、一人の人物が 2 方言を同時期に観察した珍しい例として取り上げる。

この 2 作品のシナリオは、何回か活字化されているが、本稿では原則として、最終版と思われる依田（1984）（以下「84 年版」）により、必要に応じて最初の版の溝口（1937）（以下「37 年版」）を参照する。これらの他、依田（1983a）などにも 2 作品のシナリオを掲載。

- ・溝口健二 1937『溝口健二作品シナリオ集』文華書房
- ・依田義賢 1984『依田義賢シナリオ集 (2)』映人社
- ・依田義賢 1983a「『浪華悲歌』『祇園の姉妹』——日本映画名作シリーズ①——」『シナリオ』1983年1月号

84年版を優先するのは、現代仮名遣いなので語形確定に有利だからである。両者は漢字・仮名表記を除き語句の異同はわずか。依田は1991年没なので、仮名遣いの変更は依田自身によると考える。方言について戦後の版で新形に変更されている点はない。ただ、どの版も誤植が目立ち、84年版で改善されているともいえない。しかし全体的傾向を見るのには問題ない程度である。

2作品の映画はともに溝口健二が監督だが、溝口は依田が書いたシナリオをそのまま採用したのではなく、制作段階から2人で議論を行い、溝口の指示で修正した箇所が多量にあるという。37年版の溝口による「後書」には「シナリオはすべて依田義賢君が執筆、小生が想を構へ依田君が筆を走らせ時として依田君アイデアを呈出し小生が加筆した。何処までが彼何処までが私の仕事なるや渾然として分ち難きものあり、よつて共同作品とする」とある。映画では2本とも原作・監督溝口健二・脚色依田義賢。37年版著者も溝口健二。一方、84年版は原案・監督溝口健二、本全体の著者が依田義賢。ただ、方言についてはほぼ全面的に依田によると考える。溝口は関東大震災を機に京都に移住して10年以上が経過していた（新藤兼人1976『ある映画監督——溝口健二と日本映画——』岩波新書）が、東京出身だったことと、依田（1983b）「『浪華悲歌』『祇園の姉妹』あれこれ」『シナリオ』1983年1月号の記述を参照。

現在、DVDで2作品の映画を視聴できる（松竹株式会社ビデオ事業部発売・販売、DB-0001、DB-0002）。しかしDVDとシナリオでは語句に多量の相違がある。これは、溝口作品では一旦出来上がったシナリオを撮影現場で再度修正することが極めて普通だったためと思われる。2作品については、この撮影現場での修正も、方言は依田の指示によるとと思われる。依田1975「『ある映画監督の生涯（私家版）』をみて——溝口健二の演出法——」『シナリオ』31-6の記述と、2作品の主演山田五十鈴の証言（上記新藤1976所収）を参照。そして活字化されたシナリオはこの撮影現場での修正が反映されていないのだろう。

なお、2作品の映画の演者のうち主演の山田は1917年大阪市出身で音声面の資料としても有用。山田は典型的京阪アクセントで、『浪』『まゝした、はっゝた』、『祇』『ゝました、ゝはった』と、京阪の違いを演じ分ける。但し『祇』でも「ゝはなゝし（話）」「ゝおとゝこ（男）」など一部大阪的アクセントが現れる。この時代の方言指導は情報がないが、山田自身の工夫だったのか。山田以外は京阪出身者が少なく、アクセントも非京阪的特徴が現れる人が多い。

上記依田（1983a）には、自分は京都出身で京都・京ことばには詳しいが、大阪・大阪弁は十分ではなく、「大阪弁はずいぶん後で直した」とある。しかし 37 年版と 84 年版で大阪弁に顕著な違いはないので（「のだ」を除く。2 節参照）、修正は主に 37 年版成立以前か。修正に別人が関わった可能性があるが不明。

この他、『祇』は 1956 年にも映画が作られたが、オリジナルとは内容が相当変わっている。そのシナリオ（下記。リメイク版と呼ぶ）も依田が担当。

・依田義賢 1956 「シナリオ 祇園の姉妹」『映画評論』昭和 31 年 5 月号

リメイク版刊行時、溝口はまだ存命だったが別の監督（野村浩将）による製作予定が記されている。この映画は未見だがリメイク版付記に「製作にあたっては多少の改変が行われるはずです」とある。リメイク版は、方言面では登場人物に東京弁話者が 2 名登場するようになったことを除き、大きな変更はない。リメイク版は現代仮名遣いだが「やゆよつやユヨツ」はほぼすべて大字で、オノマトペなどに小字の「ッ」が現れる程度。84 年版は「やゆよつやユヨツ」の大小の区別は正確。リメイク版は必要に応じて言及するにとどめる。

②高浜虚子と長田幹彦の小説など

依田より上の世代について、大阪は主に先行研究・報告により、落語速記及び古録音を若干参照する。京都は資料・研究とも少ないので、先行研究・報告に加えて以下の小説の京都方言の会話部分を資料として用いる。

・愛媛県松山出身の高浜虚子 1907 「風流懺法」の「一力」の部分（『ホトトギス』10-7。以下「虚」と呼ぶ）。

・東京出身の長田幹彦 1913 『祇園』（浜口書店版。以下「長」と呼ぶ）。

いずれもネイティブの作ではないため正確さが問題になるが、適切なネイティブによる作品が存在しないため致し方ない。なお、虚子・長田いずれの作品も複数の版があり、版により方言形にも異同がある。

虚子の「風流懺法」は、上記初出を 1908 年単行本『鶏頭』（春陽堂）に収める際、主人公のモデルの芸舞妓田畑三千女に方言を直してもらったという（松井利彦「解題」『定本高浜虚子全集第 5 巻』1974 毎日新聞社）。三千女は、夫の田畑比古編集の俳誌『東山』の、3-2 「三千女追悼号」（1958 年）によると、1895 年滋賀県永原村生、3 歳頃から祇園在住。その後、これと「続風流懺法」「風流懺法後日譚」を併せて単行本にした 1921 『風流懺法』（中央出版協会）ではさらに方言修正が行われたが、虚子はそれを鍋平朝臣（大道弘雄）に依頼した（『定本虚子全集 15』p.221 鍋平宛書簡）。鍋平は三千女を含む複数の人に尋ねて修正したとのこと（鍋平朝臣 1958 「三千女の思い出」三人会のこと『東山』3-2）。鍋平は大阪朝日新聞記者だったらしいが（山本真紗子 2010 「阪

急百貨店美術部と新たな美術愛好者層の開拓」『コア・エシックス』6 など)、出身地未詳で、鍋平（1958）に掲載された京都方言文はそれほど現実の方言に忠実ではない。虚子の作品は方言だけでなく文章そのものが相当改変されていて相違が複雑である。本稿ではとりあえず『ホトトギス』『鶏頭』版によって、一部の項目について具体例をあげる形で断片的報告を行う。

長田のものは同一作品に非常に多くの版があり、大きな改変はないが語形の細かな異同が数多く、すべてを確認することは極めて難しい。異同発生経緯も未詳。本稿ではもっぱら最初期の浜口書店版による。細部の問題はさておき、全体としては現実の方言をかなりよく写していると思われる。

これらの小説より古い明治期の京都方言のテキストはほとんどない。辻（2009）が扱う落語テキストがほぼ唯一だが、大阪方言との峻別が難しそうで、今回は扱いを見送った。

③依田より下の世代の諸資料

依田より下の世代については、主に先行研究・報告による。但し京都は2節の「のだ」に関してのみ、ネイティブの大村しげ〔重子〕（1918-1999、現京都市東山区生）と田村喜子（1932-2012、京都市中京区生）の作品を取り上げる。

大村しげは「財産」『婦人朝日』（1952年9月号）を扱う。2,000字程度の短文だが現実の方言に忠実に書かれた随筆で、戦後の早い時期の資料として価値が高い。この文体は、後の大村の、共通語と方言を融合させた随筆とは異なる。大村のものは「のだ」については依田と類似の方言特徴を持つ。

田村喜子は京都が舞台の小説『むろまち』（1971年修道社）を取り上げる。この作品は種々変化が兆し、より下の世代の方言への橋渡しと位置付けられる。

これより下の世代の人によって方言で書かれた文章は、擬古的特徴を持つものが多いので、そのような性格の資料として簡単に触れる。

1.3 記述の手順

本稿で扱うのは、「のだ」（2節）、敬語（3節）、否定（4節）、引用の「と」（5節）、語尾のス・ル（6節）、文章語への接近・擬古方言（7節）等である。

各項目について、従来の研究によって明治末年を中心とする当該形式の概要を述べ（私の明治末年以降各世代の未発表の質問調査の結果を含む）、項目によっては新たな私見を述べた後、文献資料の調査結果を示す。どの資料をどの順序で扱うかは項目によって異なる。

音調記号は必要な場合にだけ付ける。「,」低起上昇式の冒頭（低く始まり少しずつ上昇していくことを示す）、「」大幅な上昇（高起平進式冒頭にも付ける）、「」大幅な下降、「^」大幅な拍内上昇、「^」大幅な拍内下降。

2. 「のだ」——ノヤ・ネヤ・ニヤ・ンヤ、ネ・ネン、テン——

2.1 京都の状況

「のだ」類の語形は雑多で、かつ京阪で語形・用法に違いがある。まず京都の状況を見ていく。

(1) 使用語形

明治末年生の使用語形は、ノヤ、ニヤ、ノドス、ノス（ノドスの訛）；ンヤ、ンドス；ネである。丁寧形ドスはデスもあるが、簡略化してドスのみをあげる。上記諸語形のうち、「ノヤ、ニヤ、ノドス、ノス；ンヤ、ンドス」と「ネ」はかなり性格が違う。そのため前者諸語形を「ノヤ系」、後者を「ネ」と呼ぶ。

ノヤ系は真偽疑問文・選択疑問文の場合にヤが義務的に省かれる。その場合、非丁寧形でカも省略されることもある。「ノ（カ）、ン（カ）；ノドスカ、ノスカ、ンドスカ」。ヤを含むニヤもこの場合使えない。例：、「ほんまに○`行く`の（`）`か。○`行く`の。×行くにゃか。×行くにや。疑問語疑問文ではヤは省かれないのが原則だが、女性語的には省かれることもある。丁寧・非丁寧を問わず疑問語疑問文ではカを付けないのが普通（下の世代では丁寧形にはカを付けることもある）。例：、「いつ`行く`にや。いつ`行く`の。いつ`行く`のど（`）`す。

平叙文ではヤが付くのが原則だが、女性語的にヤが省かれることがある。例：「行く`の。`行っ`たん。

ノはノンになることが稀にあるが、数は多くない。

アクセントは上記語形すべて低接し、各語形内部は平坦が普通。但し、ネは後述のように、用法によって低接しネの内部で上昇する場合がある。

(2) ノヤ系について

(2-1) ンヤ・ンドスの前に来る語——末尾が広母音（過去）。

ンヤ・ンドスは広母音 a の後、かつ過去形の後に付く。eo の後は使用例がなく、どの語形が付くか不明。例：○`行っ`たンヤ。×行くンヤ。

(2-2) ノヤ・ニヤ、ノドス・ノスの前に来る語——末尾狭母音・ン・ン*（非過去）。

ノヤはニヤ、ノドスはノスと、各々置き換え可能。これらは、音声的には狭母音 [iu]・ン・ン*のどれかの後に現れる（例外あり）。意味用法的には非過去か非過去否定の後に現れる（例外なし）。ン*は「無声鼻音＋撥音」で全体が1拍。以下同様。例：、「あ`る`ノヤ、あ`ん`ノヤ、あ`る`ニヤ、あ`ん`ニヤ（有るのだ）；あ`ら`へんノヤ、あ`ら`へんニヤ（無いのだ）；無`い`ノヤ、無`い`ニヤ；あ`る`ノドス、あ`ん`ノドス、あ`ん`ノス（有るのです）。以下の例は不可。例：×行ったノヤ。×行ったニヤ。

上記音声条件の例外は、名詞・形容動詞（以下「体言類」）の非過去形に付く場合で、広母音で終わるにも関わらず、ノヤ・ニヤ、ノドス・ノスとなる。例：‘暇’やノヤ、‘暇’やニヤ、‘暇’やノドス、‘暇’やノス。これらはンヤ・ンドスになることはない（×暇やンヤ、×暇やンドス）。従って、共時的には母音より時制が語形決定条件として適切。なお、下の世代では以下の形が多い。例：‘暇’なンヤ、‘暇’なンドス。体言類の過去形には世代に関わらずンヤ・ンドスのみが付く。例：‘暇’やっ‘た’ンヤ、‘暇’やっ‘た’ンドス。

丁寧形は丁寧の要素を前に移動した以下の形もある。特に体言類の場合はこちらのほうがずっと多い。動詞の場合：‘ありマ’ス’ノヤ、‘ありマ’ン*’ノヤ、‘ありマ’ス’ニヤ、‘ありマ’ン*’ニヤ。形容詞の場合：‘あつオ’ス’ノヤ、‘あつオ’ス’ニヤ、‘あつオ’ン*’ノヤ、‘あつオ’ン*’ニヤ（暑）。体言類の場合：‘暇ドス’ノヤ、‘暇ドス’ニヤ、‘暇ドン*’ノヤ、‘暇ドン*’ニヤ。；‘暇’ヤッ‘タ’ンヤ、‘暇ド’シタンヤ。

丁寧形を2重にした、以下のような形も使われる。‘ありマ’ス’ノドス、‘あつオ’ス’ノドス、稀に、‘暇ドス’ノドス。

(2-3) ノヤ系の前に来る語の母音・時制によって語形が異なる理由。

上のンヤ (2-1) とニヤ (2-2) はともにノヤから、ンドス (2-1) とノス (2-2) はともにノドスから変化したものである。これらの変化は、最初、時制ではなく前の母音の種類によって起こり、後に結果として時制が関わるようになったと考える。以下変化の過程を考える。

動詞・形容詞に付く場合、最初、母音 a ノヤ・ノドス→母音 a ンヤ・ンドスの変化が起こった。

一方、動詞末尾がン・ン*の場合、ンノヤ・ンノドス→×ンンヤ・×ンンドスが不可なので変化から取り残された。動詞末尾がンで終わるのは、非過去否定（必ずン）と、ル・スで終わる動詞の非過去（ルとン、スとン*の両方が可）である。例：‘あ’る’のや、‘あ’ん’のや、‘ありま’す’のや、‘ありま’ン*’のや（有）。ル・スで終わる動詞は非常に数が多いので、それ以外のものにも類推が働き、すべての非過去形でンヤなどへの変化が阻止された。形容詞の非過去形語尾 i も動詞の非過去形からの類推で変化しなかった。その後で、「u ンン*i」が揃ってノヤ→ニヤの変化を起こした。ノドスはこの変化は受けなかったが、独立に d の脱落と長音の短音化がおこり、ノドスとノスが併用されるようになった。

これらの変化が起こったため、結果として動詞・形容詞では非過去形ノヤ・ニヤ・ノドス・ノスなどと過去形ンヤ・ンドスの語形の対立が生じるようになった。それが体言類にも波及し、母音の広狭と無関係に、非過去形ヤノヤ・ヤニヤ、ドスノヤ・ドスニヤ・ドン*ノヤ・ドン*ニヤ；ヤノドス・ヤノスなど

と、過去形ヤッタンヤ・ヤッタンドスの語形が生じた。

京都でごく稀に見られるノンヤ・ノンドスの形は、タンヤ・タンドスのンからの類推で発生したと考える。なお、京阪にはないが、ルで終わる動詞の場合、ルンヤ→(ンンヤ→)ンヤなどの変化を起こした方言もある。例:すンヤ。すンデス(するのだ。するのです)。

疑問文でヤが省かれた場合もこの非過去形と過去形の使い分けは保たれる。例:「行く」ノ(「行く」のか)?「行っ」た(「」)ン(「行っ」たンか)?

以上の変化が起こった時期は不明確だが、すでに「虚」「長」でも「非過去+のや・のどす」対「過去+んや・んどす」の対立はほぼ守られる。この他に「にや」(発音はニヤかニャか)が「長」に4例見られる(但しうち2例は存疑:動詞過去形+んにやわ、名詞+にやわ)。ノスも「長」に4例みられる(3例「体言+やのつせ」。1例は「動詞過去+のつせ」で時制の使い分けの乱れ)。

一方、依田よりずっと下の世代では非過去形と過去形の使い分けが消滅し、時制に関わらずンヤが多くなる。下の世代の例:「行く」ンヤ、「行っ」たンヤ。

(2-4) ノヤ系の文中の出現位置

ノヤ系は、共通語の「のだ」同様、文末だけでなく、サカイ・ケド・シ・タラなどの従属節内にも現れる。また、ノヤナイ、ンヤナイ、ニャナイ;ノヤッタ、ンヤッタ、ニャッタ;ノヤロ、ンヤロ、ニャロ;ノヤオヘン、ンヤオヘン、ニャオヘン…などと活用もする。

(3) ネについて

(3-1) ネの出現位置——非過去形の後、かつ文末(終助詞的)——

ネは、その前に来る語はノヤ系の「ノヤ、ニャ、ノドス、ノス」と同じである。即ち、ネの前には非過去形と非過去否定形のみが来る。例:「あ」るネ、「あ」んネ(有るのだ);「あ」らへんネ、「あ」らへんネ(無いのだ);「無」いネ;「暇」やネ、「暇」どすネ、「暇」ドン*ネ。

しかし、ネはノヤ系のすべての語形と異なり、文末のみに現れる。後続する可能性があるのは、節の独立度が非常に高い、直接引用の「テ言う、ト言う、ちゅう、言う」とその敬語形のみ。それより独立度が低いサカイ・ケド・シ・タラなどの従属節内には当然現れない。他の終助詞も後続しえない。例:×行かはんネて。×行かはんネがな。cf. ○「行かはん」ノヤて(行くんだって)。○「行かはん」ノヤがな。また、ノヤ系と異なり、活用しない(×ネヤ、×ネヤナイ、×ネヤッタ、×ネヤロ)。

ネ系の丁寧形は以下のようになる。例:「そう」どすネ。「そう」ドン*ネ、「有」りま「す」ネ、「有」りま「ン」*ネ、「あつお」すネ、「あつお」ン*ネ。

このように京都のネは終助詞的特徴がきわめて強い。このネの出自については下記(5)で考察する。また、下の世代については(6)を参照。

(4) ノヤ系とネの意味用法

ノヤ系とネの意味用法を、下の世代を扱う松丸(1999)に準じ、野田(『現代日本語文法』)の枠を中心に見ていく。結論を先に言えば、ノヤ系は共通語の「のだ」とほぼ同じ用法を持ち、ネは「のだ」の用法の一部とノエ(エは終助詞)の用法を併せ持つ。平叙文と、否定文・疑問文に分けてみていく。

(4-1) 平叙文：説明のモダリティの「のだ」

平叙文については「のだ」の2用法(「説明のモダリティ」と「スコープ」)のうち、説明のモダリティ(提示・把握、関係づけ・非関係づけ)について述べる。

ノヤ系には、提示・把握の両方の用法があるが、ネには提示の用法しかない。従って、ノヤ系は聞き手がなくても使えるが、ネは必ず聞き手が必要である。関係づけと非関係づけについては、ノヤ系・ネともに両方の用法があるが、非関係づけの一部ではネが言いにくい例がある。

【提示・関係づけ】＝ノヤ系・ネの両方可。

・事情の提示：

- ①,旅行に'行き'たいネ。 ,旅費'貸してく'れへん(')'か。
- ②a ,旅行に'行き'たいニャ。 ,旅費'貸してく'れへん(')'か。
- ②b ,旅行に'行き'たいニャけど、 ,旅費'貸してく'れへん(')'か。

・換言の提示：

③'あの',会には、'かし'こいのも、ア'ホ'も、'金持'ちも、びんぽに'ん'も'み'な入って'は'る。'要するに',いろいろ'な'ひ'とが○'いや'はん'ニャ。○'いや'はん'ネ。

なお、②について、話者にとって自明の事柄は、ノヤ系では言い切りの②aより、ケドを付けた②bが、座りがよくなる。

【提示・非関係づけ】＝原則的にノヤ系・ネの両方可だが、このうちの一部の用法でノヤ系のみ。ノヤ系はニャの形で例を示す。

提示・非関係づけには、以下のやや雑多な用法が含まれる。

・すでに定まっているが聞き手は認識していない事態を提示する：

④A: '煙草 吸'うても'か'ま'しまへんか? B: ○'あき'まへん'ニャ。○'あき'まへん'ネ。[すでに規則などで決まっている場合]

・一度命令したことを再度命令(ノヤ系もそれほど使わないがネは不可)：

⑤'や'め。'こ'ら○'や'めん'ニャ。×'や'めん'ネ。

・すでに決意していたことを聞き手に提示：

⑥,わし、'絶対',総理'だ'い臣に○,な'る'ニャ。○,な'る'ネ。

【把握・関係づけ；把握・非関係づけ】＝ノヤ系のみ。

⑦ [スーパーの前の行列を見て心内発話・独話]

,安売り○'やってん'ニャ。×'やってん'ネ。

⑧ [思い出して心内発話・独話]

'そうそ、この',近く'に',薬屋'が○',あ'ん'ニャ。×',あ'ん'ネ

(4-2) 疑問文・否定文

否定文と疑問文については、説明のモダリティとスコープの両方の用法を取り上げる。下例のうち、スコープの「のだ」は以下の3条件のどれか（複数可）を満たす場合（庵 2000）とする。(a) 文中に必須補語以外の成分が含まれている場合。(b) 文中の成分が（音声的に）強調されている場合。(c) 疑問文中に疑問語が含まれている（疑問語疑問文）。それ以外は (d) 説明のモダリティとして扱う。

否定文については、ネは文末にしか現れないのでそれを否定することは不可。ノヤ系は (a) (b) (d) と、問題なくノヤ系を否定にできる。

①,わしは'し'たい'さ'かい○'してん'ノヤ,な'い。○'してん'ニャ,な'い。×
してんネない。

,他に'するひ'とが,ない'さ'かい○'してん'ノヤ。○'してん'ニャ。○'して
ん'ネ (a)。

なお、下の世代にニャを否定したニャナイの形が使えない人がある（松丸 1999）が、この世代では使える。例追加：○「,私が'貰う'ニャ'おへん、'あの
人に'あげん'ノドス (a)」、○「'むつか'しいニャ,ない'か'と'思いまっ'''せ
(d)」。

疑問文について。ノヤ系は問題なく現れる。聞き手への問いかけでも自問でも、真偽疑問文、疑問語疑問文、選択疑問文、(a)～(d)のすべてで、可能。一方、ネは聞き手への問いかけで、かつ疑問語疑問文に限って可能。

問いかけの真偽疑問文・選択疑問文の例をあげる。上記の如くノヤ系のみ：

②,こ'ん'どの,旅行、'エジプト'へ

[聞き手は],行く'ノ'(')'か。'行く''''ノ。 ×行くネ。×行くノエ。(a)

[聞き手は],お行き'や'すノドス(')'か。 ×お行きやすノドス。(a)

×お行きやすのどすネ。 ×お行きやすノエ。

次に問いかけの疑問語疑問文の例をあげる。ネもノヤ系も可能だが、通常の問いかけではネの内部で音調が上昇する (③)。ネの内部が平坦だと非難の意味になり、男性語的 (④)。ネは③④ともに低接。ネはやや長く引くことも可。

また通常の問いかけ(③)に限ってノエも可能。ノエは低接しエの前で上昇する。

③ [通常の問いかけ] (下例「る」は「ん」も)

,今`度`,いつ`来てくれる`ネ。 `来てくれる`ニャ。(a)(c)

`来てくれる`ノ`エ。 `来てくれる`ノ`(`)`ヤ

④ [聞き手にひどいことをされたので立腹して] (下例「る」は「ん」も)

,なに`する`ネ。 ,なに`する`ニャ。 ,なに`する`ノヤ。(c?)

×,なに`する`ノ`エ。 ×,なに`する`ノエ。

上の④は単なる非難で「何か」を尋ねていないが、問いかけと非難を兼ねた文(⑤)ではネ内部は上昇・平坦の両方可。平坦のほうが語気強く男性語的。

⑤,なんで `言`うた`と`おりに`せ`ーへん`(`)`ね。 `せ`ーへん`(`)`ね(a)(c)

(上昇ではノヤ、ニャ、ノエで、平坦ではノヤ、ニャで置き換え可能)

なお、「聞き手が気づいていない事態に対して注意を向けさせようとする」(共通語のヨに似た)終助詞としては他にゼ・デ・ゾ(男性語)があるが、これらは疑問詞疑問文を含むすべての疑問文で使えない。ゼは下の世代で廃滅。

③' ×,今`度`,いつ`来てくれる`ノ`(`)`デ。

(4-3) 平叙文におけるノエと同義のネ

平叙文のネには、ノヤ系では置き換えられないがノエ・ノヤゼ・ノヤデ・ニャゼ・ニャデで置き換えられる用法がある。共通語の「のだよ」相当の、聞き手が気づいていない事態を教え、それに注意を向けさせる意である。なお、終助詞エはその前のヤが義務的に脱落するので×ノヤエにはならない。

①`この`,学校、`化け`もんが,出`る`ノ`エ、,出`る`ネ、,出`る`ニャ`デ(デは男性語)。(丁寧形: `出ます`ノ`エ、`出ます`ネ。稀: `出ます`ニャ`デなど)

この用法では、ネは低接し、ネの内部で上昇する。やや長めに発音されることもある。これは「提示・非関係づけ」のノヤ系・ネに意味的に近く、上の文もそちらで言うこともできる(①')。但し後者のネ内部の音調は平坦。

①'`この`,学校、`化け`もんが,出`る`ネ、,出`る`ニャ。

子供へのやさしい言い聞かせの場合、ノヤ系(提示・非関係づけ)で言い切るのは不可で、必ずエ・ゼ・デを後続させることが必要である。ネを使う場合、必ずネの内部やゼ・デの音調は上昇する。

②[子供にやさしく言い聞かせ] `で`ん車の,中`で`は`,し`ず`かに`する`ノヤ`デ。 `する`ノ`エ`する`ネ。

(5) ネの出自——ノエから?——

京都のネの出自は不明確である。大阪のネ・ネンは、後述のようにノヤ→ネ

ヤ→ネ、ネンの説があるが、京都の場合ネヤが現れないので無理がある（後述するが大阪でもこの説は成立し難い）。私は一つの可能性として「ノエ（ノヤ系のヤの脱落形＋終助詞エ）→ネ」と考えている。その理由は以下の通り。

まず、ノエはネ同様、非過去形の上に付く。またノエはネ同様、文末のみに現れる。ノエとネの出現条件は同じである。

次にネには用法によって二つの音調がある：①低接してネ内部が上昇、②低接してネ内部が平坦。このうち①はノエ（低接しノエ）で置き換え可、①の一部（疑問語疑問文）と②の多くは、終助詞を付けないノヤ系で置き換え可。

ここで、ネは元来①の用法しかなく、ネはノエと同義だったが文法化が進み、②にまで用法を拡大したと推定する。そして用法拡大の理由を以下のように考える：用法①に属する疑問語疑問文のネ（4-2）がノヤ系で置き換え可能なこと。同じく①の「のだよ」のノエ・ネ（4-3）も、終助詞なしの提示・非関係づけのノヤ系の用法に近いこと。

もっとも資料が乏しく実証は難しい。ネは、ネヤ・ネンも含めて、「虚」「長」には現れない。しかし同じ著者でも『祇園しぐれ』（長田幹彦 1934）にはネが非過去形に付く終助詞的用法で現れるので、この間に発生または増加した可能性もある。但し、後述の大阪の状況を考えて、非ネイティブの著者たちの観察が当初不完全だった可能性が高いと考える。

（6）より下の世代の状況

ずっと下の世代の京都の状況は松丸（1999）に詳しいので、ネ・ネン・テンを中心に簡略に述べる。ネは衰滅傾向でネンに置き換わる。さらに過去形にテンを使うように変化する。その際、上の世代のネと異なり、ネン・テンは終助詞的特徴が弱く、ノヤ系の用法に近い点が若干ある。この特徴は後述の最近の大阪と一致する。京都のネン・テンが大阪方面から借用されたことを示すのだろう。また上述のようにノヤ系の過去と非過去の語形の使い分けも失われる。

京都でネン・テンが現れる、著者の生年が最も早いのは、管見による限り1909年京都市中京区龍池学区生・育ちの、天野忠 1972年「酸素そのほか」（1974『天野忠詩集』永井出版企画 p.432, p.442。経歴は同書による）のテンか（ネンは未詳）。「気がつかはったことがありますてん。」（p.432）「気が楽になりましたんへえ…」（p.442）。同書の方言で書かれた詩は他にも大阪弁的か新しい特徴が散見する。「何ちゅうことするんや」p.431、「見えるときがあるんや」p.436、「居てはって」p.439、「おかん（母）」p.460。氏の勤務先（奈良市）も関係するかもしれないが、一般に文法・語彙は成人後に下の世代・テレビ等の影響を大きく受ける人があるのだろう。なお天野と同学区の1学年下

表 1

	前に付く語	位置	数	非文末の後続語
にや*	非過去	文末	1	—
ね**	非過去	文末	6	—
の	非過去	文末	1	—
のどす	非過去	文末	5	—
	非過去	非文末	4	し、もん2、やろ（どっしゃろ）
のや	非過去	非文末	2	おへん、ろか
んどす	過去	非文末	4	けども2、ね、せ（んどっせ）

* この作品の「やゆよつ」は大きい字のみ。 ** うち1例ねえ。

ネン・テン・ネヤはすべて用例なし。

の女性の一人はこれらの新形を使わない。天野は例外として他の資料を見よう。

大村しげ（1918年生）1952「財産」には、ネン・テンは現れず、前節までの記述どおりの形を保つ。表1を参照。なお、大村の、1990年の対談「京都の文化は誤解されている」『婦人公論』75-11の文字化などでは「ねん」が現れるが、これは文字化作業者のミス（なじみがある語形の影響）の可能性が高い。大村自身が書いた、方言と共通語を融合させた文体の多数の随筆にはネン・テンは現れない。

昭和前半生では、古形のままの人も、ネン（さらにテンも）が現れる人も共にある。

1932 東山区生の秦恒平によると「先生、その日、あて、ぐつ悪^{わる}おすねん」という文は、大正末年頃生の京都人の「完璧な京ことば」である（1978「東と西」。引用は2008年「きのう京あした」『湖の本』随筆44 著者刊）。

田村喜子（1932生）1971『むろまち』はネンの使い始めの状況をよく反映する。次頁表2参照。この作品は「ねん」が少数現れるが（テンは例なし）、「ね」同様すべて文末にある。流入当初は「ね」と同様文末でのみ使われたのだろう。また「んや」が非過去形でも使われ始めているが、用言に付いた例は少なく「体言+なんや」が多い。「にや」が少なく、「のす」がないのはこれらが音の崩れという意識があり、文章語にふさわしくないと感じられたためか。

なお、本稿で扱う「のだ」に近いネ（低接し、平坦か上昇）と、共通語にもある間投・終助詞ネ（高接または順接し、平坦か下降）は、音調が異なるので話し言葉では区別が容易だが、文字では区別がやや困難なため、書き言葉では前者を「ねん」で表記してしまうのが便利である。そのため書き言葉では一層「ねん」が多くなることもあろう。

表 2

	前に来る語	位置	数	非文末の後続語
にや	非過去	文末	1	
ね	非過去	文末	26	
ねん	非過去	文末	5	
の	非過去	文末	7	
	非過去	非文末	30	え 4、か 26
	過去	非文末	1	か
のじゃ*	非過去	文末	1	
のです	非過去	非文末	2	か 2
のどす	非過去	文末	5	
	非過去	非文末	13	か 5、がな 1、けど 2、さかい 2 (どっ〜)、やろ 1 (どっ〜)、たら (どし〜) 2
のや	非過去	文末	98	
	非過去	非文末	62	あらへん 2、がな 2、けど 3、さかい 4、し 1、やったら 3、で 15、な 2、なあ 5、ないか 5、もん 2、ろ 18
のん	非過去	文末	2	
	非過去	非文末	1	え
のんどす	非過去	文末	2	
	非過去	非文末	1	か
のんや	非過去	文末	3	
ん	過去	文末	1	
	過去	非文末	19	え 3、か 16
んどす	過去	文末	15	
	過去	非文末	10	か 1、けど 2、さかい 3 (どっ〜)、やろ 3 (どっしゃろ)、え 1 (どっ〜)
んや	過去	文末	50	
	過去	非文末	23	から 1、がな 1、けど 2、さかい 4、て 1、で 2、な 2、なあ 1、やろ 9
	非過去**	文末	6	
	非過去***	非文末	4	ろ 3、で 1

* 立腹した場合。** 「動詞+なんや」 3、「体言+なんや」 3、*** 「体言+なんや」 4

2.2 大阪の状況

大阪の状況につき、先行研究をまとめた後、変遷過程・語源について私見を述べる。意味用法については史的変遷の考察に必要な事柄についてのみ扱う。

(1) 使用語形

使用語形は以下のとおり。ノヤ系は、ンジャ・ンヤ；ンデス、ノジャ・ノ

ヤ・ネヤ；ノデス。丁寧形デスは位相によってデヤス、ダス・ダにもなる。ノはノンになること・人がある。ネ系は、ネ、ネン、テン。なお、ネ系の丁寧形はその前の語を丁寧形にする（例：「行きますね、そでやすね」）。

(2) 変遷過程

変遷過程につき、ネ系を中心に考察する。前田勇（1965 など）以来、ノジャ→ノヤ→ネヤ→ネ、ネンと考えられているが、本稿では別説を唱える。

ネ・ネンはともに近世までは遡れない（前田 1965）。そこでネ・ネンが現れる可能性がある最古の資料である明治中期落語速記本（『滑稽曾呂利叢話』1893 所収「三枚起請、猿後家、吹替息子、棒屋」と『速記の花』1892 所収「百年目」）を見ると、ノヤ系の諸語形のうち、ノ・ンで始まるものはあるがネヤはない：「のぢや、のや、のです、のでござります、のか、のだ（共通語的）」など 135（うち過去形に付くもの 27）；「んぢや、んや、んです、んか、んだ（共通語的）」など 38（うち過去形に付くもの 26）；「のんぢや」1（うち過去形に付くもの 0）。ノ始まりが非過去に、ン始まりが過去に付く傾向はこの時期から見られる。乱れの一因は共通語的語形の混入。ノヤ系の諸語形は文末・非文末・従属節のすべてに用例が見られる。

ネ系はネのみが現れ、ネンはない。25 例あるネは全部非過去につき、位置は文末のみ。うち 14 が平叙文末、11 が問いかけの疑問語疑問文末。明治中期落語速記のネは 2.1 節の京都の状況に非常に近い。用法も 2.1 節の範囲内に収まるが、京都の音調で発音すれば平叙文はネ内部が全例平坦。疑問語疑問文は上昇・平坦共に可が大部分（但しうち 2 例は卑語付きで平坦のみ：「何」さらすね」「何を云ひくさるね」）。発話者は男女とも。丁寧・非丁寧の両方に付く。

従って、京都同様、前田説は成り立ち難い。ネの語源を京都ではノエと考えたが大阪にノエはないので不可。しかし大阪でも当初は文末のみに現れるので成立に終助詞が絡む可能性が高い。現時点では別語源が考えられないので京都方面からの借用と考える。当時なら京都からの借用は必ずしも不自然ではない。

速記本に次ぐ明治末～大正期発売の大阪落語録音につき、小杉（2003）はネとネンを同勢力とするが、次頁表 3（金沢 1991 の聞き取りに従い小杉の表を補訂した物。小杉に倣い、非過去形に付く例のみ、ノデス・ンデス等は省略）によると、語形ネーをネの変種とすれば、染丸（生年は早いが録音時期が比較的新しい新作落語で新形が目立つ）を除きネがネンより優勢。それが表 3 より下の世代でネン優勢を経てネン単用となる。[テデ] ンはネンより後に発生し、表 3 より下の世代で初めて現れる。なお、ネンはタンヤのン等からの類推で、ノ→ノンと共にネ→ネンと考える（ノンは後に共通語ノの影響もあり廃れたが、ネンは廃れなかった）。

表 3

		ネ	ネー	ネン	ネヤ	ノヤ	ノジャ	ノンジャ	ンジャ
曾呂利	文末	2	1	2	0	2	4	1	0
	非文末	1(で)	0	0	1(<u>よって</u>)	1(<u>が</u>)	2(い、ろ)	0	0
文団治	文末	1	0	0	0	0	0	0	0
	非文末	0	0	0	0	0	0	0	0
文三	文末	1	0	0	0	0	0	0	0
	非文末	0	0	0	0	0	0	0	0
枝雀	文末	2	0	2	2	0	5	0	0
	非文末	1(<u>けどな</u> <u>あ</u>)	4(<u>が</u> 1、 <u>な</u> 2、 <u>がな</u> 1)	0	1(<u>しらん</u>)	1(<u>おまへ</u> <u>んか</u>)	1(<u>が</u>)	0	0
染丸	文末	2	1	13	4	0	0	0	0
	非文末	0	1(<u>な</u>)	1(<u>けど</u>)	10(<u>いな</u> 3、 <u>がな</u> 2、 <u>けど</u> 1、 <u>し</u> 1、 <u>で</u> 2、 <u>はか</u> <u>い</u> 1)	4(<u>けど</u> 1、 <u>と</u> [引用 か] 2、 <u>しらん</u> 1)	0	0	0
松鶴	文末	11	0	12	1	1	4	0	0
	非文末	3(<u>けども</u> <u>で</u> 、 <u>な</u>)	2(<u>な</u>)	0	1(<u>がな</u>)	3(<u>い</u> 、 <u>な</u> <u>い</u> 、 <u>ん</u>)	3(<u>い</u>)	1(<u>い</u>)	0
文雀	文末	6	1	0	0	0	0	0	0
	非文末	2(<u>けども</u> <u>わな</u> <u>あ</u>)	0	0	1(<u>さかい</u>)	1(<u>さかい</u>)	1 (<u>い</u>)	0	0
計	文末	25	3	29	7	3	16	1	1
	非文末	7	7	1	14	10	9	1	0

注：疑問文のノ（カ）、女性語の文末ノは省いた。後続語のうち、従属節末の接続助詞には下線を付けた。前に付く語は、ネ、ネー、ネン、ネヤ、ノヤ、ノジャ、ノンジャは非過去形のみ。ンジャは殆どの例が過去形に付くが、この表には例外的に非過去形に付いた例のみをあげる。文雀は奈良生でアクセントは他と異なるが、語形・終助詞音調に方言差はなかったと考えておく。資料のうち文枝は除外したが、標準語的な語形・アクセントを交えて硬い話しぶりのため（金沢 1998b）。なお文枝にはノジャ・ンジャの他ノダも現れる。聞き手が必要とし、話し言葉的なネ、ネー、ネンは現れない。

表 3 からわかるように、ネ・ネンは文末に偏るが、非文末でも少数ながら現れるように速記本の状況から変化している。これは、ネがノヤと混交を起こし、ネヤが生じたことを契機に、ノヤ・ネヤ・ネの用法が接近したためと考える。野間（2013）とは逆方向の変遷過程を考えるわけである。

表 3 の録音の、ネの音調は低接・内部平坦が多いが、疑問語疑問文末（非難ではなく通常の問いかけ）・平叙文末ともに低接・内部上昇のネの例がある。文雀：「何の、おかずしてや（'）ね（テヤ敬語）」「糊の）は'かりが、えー

「ねー(量りが良えねえ)」(『古今東西噺家紳士録』)。共に女性発話。京都なら「ノエ」で置換可能の例で、京都からの流入説に有利。類例は少し後の落語録音にも見られる。

ノヤ系の、非過去に付く場合（ノはじまり）と過去に付く場合（ンはじまり）の区別はここでも見られるが、ずっと下の世代では、非過去・過去を問わずに はじまりになる。なお録音資料の聞き取り結果は作業者によって幅がある。

2.3 依田のシナリオ

依田作品の調査結果を表 4-1 ～ 4-4 にまとめた。表中、「位置」「非文末」欄の（ ）内は後続語で、「ナシ」は該当語例がないことを示す。\$ を付けたのは、1 例しかないもの（\$ がないのは複数例ある）。

表からわかるように、前 2 節の同世代の方言記述と一致し、京阪の違いがよく書き分けられている。

表 4-1

	前の語	位置（後続語。『祇』・『浪』で違いがある場合は「『祇』；『浪』」の順に示す）	『祇』	『浪』
の	非過去	文末	4*	2**
	非過去	非文末（え、か（いな）；か（いな））	19	7
のだっ	非過去	文末	0	0
	非過去	非文末（ナシ；か）	0	2
のです	非過去	文末	0	1
	非過去	非文末	0	0
のどす	非過去	文末	2	0
	非過去	非文末（え、か、がな、けど、って\$、な、もん、わ；ナシ）	19	0
のどっ	非過去	文末	0	0
	非過去	非文末（さかい\$、しゃろ\$、せ；ナシ）	4	0
のとちが	非過去	文末	0	0
	非過去	非文末（うの\$）	1	0
のや	非過去	文末	27	12
	非過去	非文末（さかい、ったら）	31	9
のん（のン1を含む）	非過去	文末	1	0
	非過去	非文末（か（いな））	0	4
の	過去	文末	1***	1****
	過去	非文末	0	0

* 疑問文 3、平叙文 1、** 疑問文 1、平叙文 1。*** 平叙文。**** 疑問文

表 4-2

	前の語	位 置	『祇』	『浪』
にや	非過去	文末	0	0
	非過去	非文末 (けど、さかい \$、ったら \$; ろ \$)	9	1

表 4-3

	前の語	位 置	『祇』	『浪』
ん	過去	文末	3*	5*
	過去	非文末 (え (な)、か (いな); か (いな))	6	5
んです	過去	文末	0	5
んです、んでしょ	過去	非文末 (ナシ; う \$)	0	1
んどす	過去	文末	6	0
	過去	非文末 (か \$、けど \$、わ; ナシ)	4	0
んとちが	過去	文末	0	0
	過去	非文末 (う \$、います \$; ナシ)	2	0
んどっ	過去	文末	0	0
	過去	非文末 (せ; ナシ)	2	0
んにや	過去	文末	0	0
	過去	非文末 (けど \$; ナシ)	1	0
んや	過去	文末	9	18
	過去	非文末 (がな \$、さかい、って \$、な \$、もん \$、やろ \$、やわ \$; おわへん \$、が \$、がな \$、から \$、けど、し \$、で \$、ない、ねん \$、やろ)	8	18
ん	非過去	文末	0	1*
	非過去	非文末	0	0
んです	非過去	文末	0	1
	非過去	非文末 (ナシ; か \$)	0	1
んや**	非過去	文末	0	4
	非過去	非文末 (ナシ; さかい、ったら、で、ねん \$、ろ \$)	0	7

* すべて疑問文。『浪』の「謝るんねん、なるんのや」の2例は削除

** すべて動詞に付いた例である。

表 4-4

	前の語	位 置	『祇』	『浪』
ね	非過去	文末*	18	42
	非過去	非文末	0	0
ねや	非過去	文末	0	4
	非過去	非文末 (けど、で \$、な \$、やろ (か))	0	9
ねん (ねン 2 例を含む)	非過去	文末	0	18
	非過去	非文末 (けど、て、な、や**、やな**)	0	12
てん、でん	音便形	文末	0	9
	音便形	非文末 (や)	0	2

*「かまへんね、番頭の家やさかい」のような倒置 2 例を含む、** 断定のヤが後続しているのでネンは文末詞化不完全

「ねや、ねん、てん、でん」は『浪』のみで、『祇』には現れない。「にや」はほぼ『祇』に限られ、『浪』は 1 例のみ。

興味深いのは『浪』にだけ非過去形に付く「ん (や)」が見られることである。この形は下の世代のものだから、『浪』が新形を採用していることがわかる。『祇』の「にや」は非文末のみだが、文末でも使われたと考える。

リメイク版『祇』では「にや」が 4 例、うち 2 例が文末。また後述『浪』37 年版の状況も参照。ニャが少ないのは前節の『むろまち』同様、音の崩れ意識、文章語への接近のためであろう。

実は、37 年版の「のだ」の語形は、『祇』は 84 年版とほぼ同じだが、『浪』はかなり語形が異なる。誤植らしい物や意味変化が関わる例を除くと、以下の相違がある。いずれも前に付く動詞は非過去形。

「37 年版→84 年版」の順に示す。にや→のや 6 例、にや→ねや 3 例、んやろ→ねやろ 1 例 (焼くんやろ→やくねやろ)、ね→ねん 1 例、のんや→ねん 1 例 (「にや」9 例中 7 例は文末)。37 年版に「にや」(発音はニャか)が多数あるが、84 年版では 1 例をのぞき他語形に置き換えて消滅。37 年版以降にニャが大阪にないことに気づいたのだろう。

3. 敬語

敬語は日本語諸方言で、無敬語地帯を除き小地域の方言区画の指標となることが多い。京阪方言も例外ではなく、古くから方言差が注目されていて研究も多い。概要と依田作品の結果を述べ、若干の私見を加えるにとどめる。

3.1 ドス・ダス・デス

周知の如く、丁寧断定の助動詞は京都ドス・デス、大阪ダス・デスである。

表5からわかるように、依田作品でも例外なく書き分けられている。表の語形は検索に用いたもので、例えば「どし」は「どして、どした、どしたら」など、「でっ」は「でっしゃろ、でっせ」などが、各々含まれる。「だ」はダスのスの省略形で、男性の発話。

興味深いのはデスの現れ方である。『祇』はほとんどデスがなく、ドス 121 対デス 2（主人公の若い芸者「おもちゃ」と骨董屋聚楽堂各 1）。一方、『浪』はダス 34 対デス 24 で、ダス・デスの混用（種々の登場人物に幅広く混用が見られる。但し医者は大阪方言を話すデスで統一）。当時の方言としては『浪』が実態に近く、『祇』は擬古的。『祇』は祇園の芸舞妓だけでなく、木綿問屋の主人・使用人、呉服小売商、骨董屋なども現れるが、少なくとも後者はデスもある程度使っていたはず（明治期の『口語法調査報告書』も参照）。『浪』にダス・デスとも数が少ないのは、親しい友人間の会話が比較的多いからである。なお、大阪には類義のデヤスがあるが『浪』には現れない。すでに古風だったからか。

表 5

『祇』			『浪』		
ドス系	どし	5	ダス系	だし	3
	どす	96		だす	7
	どっ	19		だっ	19
	どん	1		だん	5
				だ	1
デス系	です	2	デス系	でし	3
				です	16
				でっ	5

3.2 オス・オマス

京都では、^レオスが、本動詞「有ります」の意や、形容詞の丁寧形に使われる。後者の例：^レあつお^ス（暑いです）。一方、大阪では^レオマスが、本動詞「有ります」、形容詞の丁寧形に加え、体言類の丁寧形にも使われる。例：^レあつおま^ス（暑いです）、^レけっ^コうで^レおます（結構です）。

表6から、若干乱れがあるが依田作品ではほぼ書き分けられていることがわかる。『祇』の「おます」3例のうち2例は37年版では「おす」。この2例とも本動詞で、誤植でなければ京都では本動詞のオスが補助動詞よりやや早く衰退気味になったのが関係するか（近世末の京都のオマスとは

表 6

『祇』			『浪』		
オス系	おし	3	オス系	おし	1
	おす	17		おへ	2
	おっ	1	オマス系	おま	20
	おへ	11	ゴワス系	ごわ	1
オマス系	おま	3		おわ	1

無関係)。

なお『浪』は「おま」で切る例はなく、「おます、おまんねん、おました、おまへん」など。丁寧の助動詞「ます」も「ま」で切る例はない。なお『祇』の「おす」は鼻音始まりの付属語後続でも「おん」の例なし(6節参照)。

『浪』には少数だが「ごわす・おわす」が現れる。「おわす」は「不都合なことをしたんやおわへんでっしゃろな？」の1例。「ごわす」「おわす」ともに、主人公アヤ子の父の準造(登場人物中で高齢)の台詞。なお、37年版には「よろしおはすわ」「ごわいます」の例もある(84年版では、「よろしいおますわ」「ございます」に変更)。

3.3 尊敬助動詞——オ～ヤス・ナハル・ハル・オ1段化——

尊敬の助動詞のうち、代表的なオ～ヤス・ナハル・ハル・オ1段化を扱う(テヤ敬語は依田・「虚・長」に例なし)。各語形とその用法について検討する。

① オ～ヤス

オ～ヤスは京都に多く、大阪では船場言葉(京都から借用したか)を除き挨拶等慣用表現を中心に使用される。オなしのヤスは殆ど使われないが、京都で継続・結果態でトイヤス(←テオイヤス)と共にテヤスは使う。ヤスのアクセントは低接平坦だが、オ付きのオ～ヤスは低起上昇式でヤに核。例:「置いてやす、お置きやす」。

依田作品のオ～ヤスは、『祇』では一般的尊敬語・挨拶とも多数例が見られるが、『浪』は11例中9例までが挨拶:「おいでやす」4、「御免やす」4、「お越しやす」1。残り2例は命令形(お～やす)。これも実態をよく反映する。オ～ヤスは、原則としてオ付きで出るが、例外的にオのない「て下さい」の意のテクレヤスという語形が、『祇』に7例、『浪』に1例ある。例:「世話してくれやす」(『祇』)。これは従来報告にない形で、現実には[トド](一)クレヤスが普通([テデ]オクレヤスの融合)。テクレヤスは誤植の可能性がある:37年版では上例のうち、『祇』の3例と『浪』の1例は「とくれやす」。また、依田作品でもテクレヤスより[トド](一)クレヤスが優勢。84年版で、『祇』に「とくれやす」20例、「とうくれやす」2例。非融合形の「ておくれやす」は『祇』に1例のみ。非融合形は最近の擬古的文章に頻出するが実際には稀。なお、継続・結果は「といやす」4例のみで「[てで]や[さしすっん]」の例ゼロ。「長」も「といやす」1例のみで「[てで]や[さしすっん]」の例なし。

表 7

『祇』		『浪』	
やし	15	やす	11
やす	58		
やは	1		
やつ	3		

また『祇』に「わかってんにやったら、そのようにおしやはいな...」（若い芸者の台詞）という命令形が1例ある。ヤスの命令形ヤス（終止・命令形同形）と、ナハルの命令形ナハイの混交形だろうが、従来報告が少ない。リメイク版『祇』にはこの語形なし。しかし「長」にこのヤハイが10例あるので上の世代は一定使ったか。命令形「お～やす」と敬意に大きな違いはなさそう。

用法の面では、オ～ヤスは2人称主語に偏るという指摘がある（森山1994）。森山報告より上の世代では必ずしも該当しないが、この作品ではその指摘がよく該当する。挨拶を聞き手主語の変種とすれば、『浪』は命令形2例とあわせ全部2人称。『祇』は、3人称7、2人称69（うち挨拶3、命令形32）。

②ナハル

一般にナハルは、大阪ではよく使うが、京都では稀で命令形ナハイの形を主に慣用表現に使うだけである。

依田より上の世代の「長」に「なはる」はない。「虚」は最初『ホトトギス』はナハルを使うが、『鶏頭』は多くを別形に変更。「見なはるな→見んと置きや」「帰りなはれ→お帰り」等。但し「おいなはった」の如きやや慣用的表現はそのまま残す。この変更が三千女の教示（1.2節）によるなら当時の若い

表 8

『祇』		『浪』	
		なはっ	3
		なはれ	12
		なはん	4
なはい	1	なはい	1

い京都の女性はナハルを慣用的表現でのみ使ったことになる。最初の版のナハルはより上の世代の形か、すでに大阪的になっていたのを知らずに使ったのか。

依田作品ではナハルはほぼ『浪』にだけ見られる。命令形・禁止形が多いが他も数例ある（「なはっ」3例と「なはん」のうち1例）。命令形「なはい」が『浪』にもあるが、大阪は「なはれ」が普通で京都の語形に引かれたか。一方、『祇』ではナハルは命令形「なはい」の1例を除き現れない。これも実態をほぼ反映する。但しリメイク版『祇』に「なはれ」が1例現れ、例外となる。

③ハル

ハルは京阪とも頻用するが、ハルの前の語形に京阪で相違がある。

前が5段動詞の場合、京都では「聞かはる（母音a）」で統一されており、大阪では「聞きはる（母音i）」が普通。戦前的大阪資料には「聞かはる（母音a）」優勢の物もあるが、落語関係資料は一貫して母音iが優勢。また、京阪ともおよそ明治半ば以前生のはるは上に加えて「聞きやはる」等があったと思われる（辻2009）。「虚」及び彼の写生文にはこの形も多い。但し「虚」は版により異同があり、『鶏頭』掲載時に「五段動詞+やはる」の一部を「はる」に変更。例：「向きやはつて→向かはつて」。少なくとも当時の若い女性は「aはる」が普通だったろう。「長」は「aはる」のみ（34例）だが、「言う」に限り、「云

はる」1例、「ちやはる・ちやはん」（「と言う＋はる」）各1例。後者は「やはる」の名残。「虚」「長」とも「やゆよつ」の大小の区別なく、語形がヤハルかヤハルか不明。大阪関係にはヤハルらしい資料もあるが、京都関係ではヤハルの確実な例はない。ともあれ京都では、通説通り、5段動詞について「(i ナハル) → i ヤハル (→ ヤハル) → a ハル」の変化説が妥当と考える。

1段・カ変・サ変は、京阪ともおよそ明治半ば以前生ではヤを介した形（居やはる、きやはる〔来〕、しやはる〔為〕、くれやはる、忘れやはる）が普通だったが、徐々にヤが脱落していった。その脱落は終止形3拍以上の長い動詞からはじまり、2拍はヤが残る時期がかなり長かった。脱落が2拍の動詞にも及ぶのは京都で主に大正生頃以降。「虚」は用例が少ないので「長」を見る。「長」では3拍までヤが入り（3拍下1段11例；2拍下1段1、上1段10、カ変15、サ変10）、4拍以上（4拍3例「見染めはつた」、5拍1例「化かされはつた」）でヤなし。著者の観察が正確なら、4拍以上→3拍→2拍の順にヤの脱落が進んだことになる。短いほど基礎的な語が多く、古形が残りやすかったろう。

1段・カ変・サ変のうち、上1段・カ変・サ変は拗音化した「ヤハル〔居〕、オキャハル〔起〕、キャハル〔来〕、シャハル〔為〕」などもあったかもしれない。しかし記録はなく、京都ではこれらの形は一旦ヤが脱落した後、比較的下の世代においてハルの前をaで揃える動きの一環で、終止形2拍に限って使う人が若干あるのみ（3拍以上の上1段「起きる」や、下1段にはこの傾向なし）。

進行・結果態は〔テデ〕ハルの形が普通だが、京都では大正生から下の世代では〔タダ〕ハルの形が多い（但し最近の若い世代はまた〔テデ〕ハルがやや増加気味か）。これはハルの前の母音をaに揃えようとする傾向の一環だろう。ただ、大阪では、aに揃える傾向が弱い落語録音も含めて、〔タダ〕ハルはかなり使われるようである。なお、「長」は「てやはる」「でやはる」の形で統一（13例）されていて、古形かと思われる。

表9に依田作品の結果をまとめた。カ変・サ変は1段に合併した。表から分かるように、『祇』は当時の京都方言の実情をよく反映する。5段はaで統一、1段については、2拍はほぼヤ入りで、3拍以上はヤなし。一方、『浪』は、5段にiも現れるがaが優勢。これは母方言の京都方言の影響も考えられるが、上記のようにaが比較的優勢な大阪人もあったようで、誤りとも言えない。また、4拍1段の「忘れやは」は、誤植でなければ大阪の方が3拍以上の1段でヤの消滅が遅れたのか。やや例外的な語形として、『祇』に「ちゅはんのを」（←「とい／ゆわはるのを〔言〕」）、「しまはった」（←しまわはった）の2語がある。いずれも現実の語形の反映。

進行・結果態はテハル・デハルでほぼ統一。依田の世代の京都方言ではまだタハル・ダハルが稀だからだろう。この他『祇』に「していやはる」が1例あるが、この形は現実には稀で、文章語的「している」に引かれたか。

用法の面では、ハルは一般に、命令形を欠くかごく稀なこと、3人称主語に偏ることが指摘されている。稀に2人称主語で使うとかなり待遇度が低い。実際、上の世代の「虚」

のほぼ全例と「長」の全例が3人称主語で、命令形の例はない。なお3人称主語への偏りは下の世代で徐々に薄れ、2人称主語の待遇度がやや上がる。

依田作品にも命令形はなく、3人称主語への偏りもまだ比較的顕著（表10）。但し、2人称主語で目上に対してハルを使っている例がある。この場合、下の世代を除きオ～ヤスを使うのが自然。倒産した木綿問屋の元番頭が、元主人に向かって話す台詞：「ご主人、梅吉つあんは、どうしやはるつもりどすね」。

④オ1段化

オ1段化は、女性が主に2人称で親しい相手（同輩または目下）に使う語形で、「虚」「長」は全活用形がその条件で極めて盛んに現れる。「虚」は母方言の松山の影響で使ったのではないだろう。依田作品では、オ1段化は37年・84年版とも命令形（但しオ＋連用命令とも分析可）のみ現れる：『祇』8例、『浪』7例。『祇』は融合形の「…とおみ」（←てお見）2例、「…とおき」（←て置き）1例を含む。聞き手は目下・同輩、やや目上への荒い物言い。オ1段化は命令形のみかなり下の世代まで残存したことの反映。ところが、リメイク版『祇』にはタ形が5例現れる。全て2人称主語で、「お茶屋の女将→世話している芸子」4例（例：どうおしたんえ）、「芸子→その妹」1例である。女性が親しい目下に限って使用。目下への限定は「虚」「長」以降の、現実の変化の反映だが、命令形以外のオ1段化はリメイク版の時期には相当衰退しており、擬古的語形をあえて選んだのだろう。

表9

	語例	『祇』	『浪』
5段a	行かは	31	11
5段i	笑いは	0	5
2拍1段ヤ有	居やは	21	8
2拍1段ヤ無	出は	1	0
3拍1段ヤ無	くれは	11	7
4拍1段ヤ無	倒れは	0	1
4拍1段ヤ有	忘れやは	0	1
て・で	言うては	26	16
た・だ	言うたは	0	0
合 計		90	49

表10

	『祇』	『浪』
2人称主語	23	10
3人称主語	67	38
不明	0	1

4. 否定のヘン

京阪方言の否定には、ン否定とヘン否定の2つがあり、後者の語形が雑多なのでこれについてまず述べる。

5段動詞は、京都 a ヘン (飲^マへん) で統一、大阪 e ヘン (飲^メへん) が多いが a ヘンも少し。ともにヤヘン←i ヤヘン←i ヤセンからの変化。1段・サ変・カ変は、京阪ともヤヘンの形が古いが、終止形2拍の動詞を除きほぼヤは消滅。ヤがない場合、京都は下1段 e ヘン (食^ベへん、出^ーへん)、上1段 i ヒン (起^キひん、見^ーひん)。大阪は上1段に e ヘン (起^ケへん、見^エへん) なども現れる。上例のように京阪とも終止形2拍は長音化する。

ヘン否定の丁寧形～シマヘン・シマセンの前に付く動詞語形も上の非丁寧形に準じる。但し丁寧形ではヘンよりもン (連用形+マヘン・マセン) がやや優勢で、下の世代ではヘンが衰滅してン専用になる。なお、～シマ [ヘセ] ンがヘンに属することは、～シマ [ヘセ] ンが、非丁寧形でヘンが可能な場合のみ使用可能であることから明らかである。例えば、京都で、^アカン・^アカヘン (駄目) とも可なので、^アキマヘン・^アカ () シマヘンもともに可だが、^イカン (駄目) は×イカヘンは不可なので、^イキマヘンのみ可で×イカシマヘンは不可。また丁寧形しかない動詞 (例: 存じます) もヘン不可 (例: ×存じしまへん)。一方、連用形+マセン、マヘンは、非丁寧形では使えない動詞にも使え、ほぼ万能。例: ^アラヘン、×アラン (有) だが、^アラ () シマヘン、^{アリ}マヘンはともに可能。

継続・結果はほぼ [テデ] ヘン、[テデ] シマ [ヘセ] ンで統一。

より古い「長」について、5段は a ヘンで統一。但し1例だけワ行に「構やへん」がある。5段のヤヘン・i ヤヘンの名残り。2拍1段・サ変・カ変はすべてヤを介した例のみ。3拍以上の1段動詞は語例が少ないが、ヤ入り2例 (ひかれやへん [叱]、忘れやへん)、ヤなし1例 (かも知れへん)。継続・結果は「てやへん」のみ2例。3拍以上や継続結果のヤ入りは古形か。

「虚」は例が少ないが、『ホトトギス』→『鶏頭』の順に、「かまやへん」→「かまへん」(前者はすでに古い形だった?)、「向かなんだか」→「お向きやへなんだ」(後者はオ1段の否定過去で4拍1段のヤ入り)の例がある。

依田作品の結果を表11 (各種活用形をまとめた) に示す。「長」「虚」よりも新しく、1段動詞でもヤなしが優勢で、ヤ入りはわずかに非丁寧の上1段の3例 (『祇』『浪』『いやへん』各1、『浪』『良過ぎやへん』1) と、丁寧のサ変1例のみ。なお「見いひん」の形は京都にはあるが大阪では稀か。

ン否定は、一般にヘン・ン両否定が使える環境 (紙幅の都合で省略) の非丁寧形ではヘンより劣勢だが、依田作品では必ずしもそうではない。表11-3 (両

表 11-1

*非丁寧	語 例	『祇』	『浪』
5 段 a ヘン	わからへん	24	9
5 段 e ヘン	わかれへん	0	23
下 1 段 e ヘン	でけへん	2	14
上 1 段 i ヒン	見いひん	0	1
上 1 段 i ヤヘン	いやへん	1	2
下 1 段 e ヤヘン		0	0
サ変 e ヘン	せえへん	0	4
て・でヘン	言うてへん	1	2

表 11-2

*丁寧	語 例	『祇』	『浪』
5 段 a シマヘン	わからしまへん	13	0
5 段 a シマセン	もらわしません	1	0
5 段 e シマヘン	あれしまへん	0	1
5 段 e シメヘン	くれはれしめへん	0	5
下 1 段シマヘン	でけしまへん	2	1
上 1 段シマヘン	できしまへん	1	0
サ変 e シマヘン	せえしまへん	0	1
サ変ヤシマヘン	しやしまへん	1	0

方が使える環境の用例のみカウント) 参照。興味深いのは、ンが男性に、ヘンが女性に偏る点である。現実はこの性差は若干あったようだが、それでも男性のンが実際より多すぎる。男性が古形を残しやすいのではなく、ンの位相(東京でもある時期まで人・場面により使用)や、この作品の文章語への接近が原因ではないか。

表 11-3

	『祇』	『浪』
非丁寧ン否定	26	39
女性発話	6	11
男性発話	20	28
非丁寧ヘン否定	18	39
女性発話	10	24
男性発話	8	15

5. 引用のト——「と言う」「と思う」のトの脱落——

「と言う」「と思う」のトの脱落は京阪ともにあるが、明治以降の現象で、大阪のほうが盛ん(『方言文法全国地図』)。京都では「と言う」は、「と言」が融合した「ちゅ」が最優勢で、「て言」の形もかなりあり、「と言」も少しある。「と思う」は「と言う」に比べて京阪とも若干脱落が少なく、京都ではトが残ることが多い。なお下の世代では京阪とも「言」は共通語的「って言」が優勢。

なお、トの省略は、トが「言う」「思う」の直前に現れうる場合のみ。意味用法については、直接発話を引用する場合に脱落が多く、それ以外は脱落が少ない。また、改まった場面でトが多く現れるので「お^い言^いや^す・お^い言^いや^す」などはトが残ることが多い。

上の世代を見る。「虚」は「という」2、「といふ」3、脱落・チュー・思はなし。「長」は、「言う」につき、「ちう・ちは」52、脱落29、「と云」1。一方、「長」の「思う」は、「と思」11、「脱落」10。「虚」と「長」の違いは方言の新古というより、写実性の程度差が原因だろう。

依田作品の結果を表12にあげる。表中「言う」は仮名表記「いう」なども含む。この世代の京阪の差がよく出ている。ただ、「言う」について『祇』で「と」が多いが、文章語への接近と、改まった場面の会話もあるためだろう。また「て言」がなく、依田より下の世代に多い「って言」が1例見られる。

表 12

言う	『祇』	『浪』
脱落	13	30
ちゅ	31	2
って言	1	0
と言	33	4
思う		
脱落	4	8
と思	19	11

6. 語尾のス・ルの音の交替

6.1 デス・ドス・ダス・マス・オス・オマス・ゴザイマスなどの末尾拍のスの音の交替

助動詞デス・ドス・ダス・マス、本動詞・補助動詞オス・オマス・ゴザイマスの末尾拍のスは、①ナ行またはガ行（ガ行子音は鼻濁音）で始まる付属語が後続する場合と、②カ行で始まる付属語が後続する場合に、後続音の影響で音が交替することがある。（京阪とも下の世代で交替は衰滅）。

①の場合、京都ではス～ン*なのに対して、大阪ではス～ン～ン*である。

②の場合、京都ではス～無声化が義務的なフ（フ*で表記する）である。それに対して大阪ではス～ッである。例。京都：そうですか～どうぞフ*か、大阪：どうだすか～どうだっか。

上の①②ともに交替は京阪とも義務的ではなく、スのままのことも多い。京都では、①はン*がかなり頻繁に現れるが、②はスしか使わない人もある。

依田作品では、『祇』はスのままがほとんど。これは、ン*やフ*の表記法がなく、これらも含めてスで表記しているのだろう。一方、『浪』では、①はンガスより、②はッガスよりも多い。おそらく大阪で、ン*よりもンが優勢で、フ*はなくッだったことを反映するのだろう。

なお、無声鼻音は上記のほか、京都で「そんな」の変異に「ン*な」の形がある。『祇』では、「ふんなら」が1例あり、この音を表記しようとしたのかも

表 13

	『祇』	『浪』
だん [な、ね]	0	5
どんね	1	0
だすな	0	1
ですな	1	0
どす [な、ね、の、の や、にや、がな; ナシ]	28	0
だっか	0	13
でっか	0	1
でっけど	0	1
ですか	1	1
だすけど	0	1
どすか	23	0
どすけど	9	0

表 14

	『祇』	『浪』
ます [が、がな、にや; ね、ねん、のや、んね ん #]	3	4
まん [ナシ; がな、な、 ね、ねや、ねん、の]	0	8
ますか	4	0
まっか	0	1

[] 内は後続語。 # 誤植であろう

しれない。但し「そんなら」15例で圧倒的に優勢。

いずれにせよ、表記法がない音声（ン*・フ*）は、ほぼ一貫して文章語的な
スが使われている。

より上の世代の京都の「長」は、①を「す」、②を「つ」で表記する。②は
フ*を表そうとしたものか。大小の区別のない曖昧な「つ」が幸いしている。
①はンではないので「ん」で表記することは難しく、書き言葉的な「す」で表
記したのだろう。「虚」は①②とも「す」。

6.2 動詞の語尾のル～ンの交替

動詞・動詞型活用助動詞の語尾のルは、ナ行で始まる付属語が後続するとン
に交替することがある。これも義務的ではなく、ルとンの両方が現れ、改まっ
た場面ではルが多くなる。この交替の多寡について京阪の差の報告がないが、
依田作品では『祇』より『浪』でンの比率がずっと高い。京都でもくだけた会
話ではこの作品よりンへの交替の比率がもっと高いはずで、『祇』は文章語に
引かれた可能性がある。また別の要因として、6.1節で述べた語尾のス～ンの
交替が大阪に顕著なことなどから、「大阪にはンが多い」という先入観があっ
た可能性もある。実際明治生の京都人に「大阪弁はどすんと重たい」というよ
うな人もあった。しかし、現実には差

表 15

	『祇』	『浪』
動詞語尾「る」のまま	59	23
動詞語尾「る」→「ん」	19	29

7. 文章語への接近・擬古方言

依田の2作品、とくに『祇』には、文章語への接近（4節、5節）と擬古方言（3.1節、3.3節）という2つの特徴が見られた。これについて述べる。

7.1 文章語への接近

文章語への接近は特に京阪で程度に差はない。依田作品だけでなく、明治末～昭和前半に方言で書かれた文章に多い。方言で文章を書く習慣がまだ乏しく、文体が十分定まっていなかったからである。最近「話し言葉通りに書く」ことが定着したため、方言で書かれたものも文章語への接近は薄れた。

「文章語」は、①共通語・文語の文章に現れる語形と、②方言内で交替がある時に元々の語形に近いもの、の2つの意味を持つ。②の例として、「ノヤ→ニャ」「ノドス→ノス」では、書き言葉でノヤ・ノドスが好まれ、ニャ・ノスは音の崩れと意識されるなどがあげられる。

「長」はそれほどでもないが、「虚」の特にホトトギス版は文章語への接近が顕著である。以下依田作品の別の例をあげる。

動詞のウ音便形は、3拍5段動詞は、京阪とも短くなるのが普通。しかし依田の作品では、『祇』『浪』とも、例えば「思う」は、「思うた…・思うて…」の長い形だけ（『祇』21・『浪』22）で、短いオモタ・オモテはない。

形容詞のウ音便形も後続語によって短くなることが多く、とくにオス（京都）についた時は普通短くなる。しかし依田作品では表16に示すように、『祇』の「おす」は短い形が多いが長いのもかなりあり、『浪』の「おます」は長短同数。実態不明ながらオマスはオスよりは長いのが多いのかもしれないが、それでも長い形が多すぎる。ともあれ、動詞・形容詞ともウ音便形に実態より長い形が多いのは、上記①②の両方が原因だろう。

表 16

	『祇』	『浪』
音便長+おす*	4	0
音便短+おす	10	1
音便長+おます	0	3
音便短+おます	0	3

* 諸活用形を含む。他の欄も同じ

7.2 擬古方言

『祇』は、執筆時の現実、あるいは現実よりも進んだ世界を描こうとしている。例えば「[主役の] 山田五十鈴は**かづら** [鬘の上の世代の京阪方言の発音] の鬘をつける。祇園全体で**かづら**が流行**はやり**だした時であり、ポータブルレコードプレーヤーを提げて、ロープ [ママ] 姿で行くダンス芸者が、映画の中に写っているのを見られるといい。私は高女出の芸者といわせているが、それはお茶

屋の娘さんたちであって、芸者衆にはなかった」(依田 1983a)。それにもかかわらず『祇』の方言が現実より古いのは、方言の持つイメージを生かすためだったろう。この作品は、表現効果のために擬古的方言を使う最初期の試みと評価できる。より早い時期の「虚」「長」には擬古的特徴は見られない。

『祇』が書かれた時点では、擬古的といっても現実の方言からのずれは小さかったので方言はおおむね正確。木綿問屋関係の語彙に若干誤りがある程度。元番頭「定吉」とあるが、これは丁稚の名で、番頭は改名しているはず。リメイク版で「別家」を「分家」と呼んでいるなど。

なお『浪』には擬古的特徴はほぼ見られない。当時の大阪は、この作品に見られるように、懐古にそれほど向いていない雰囲気だったのだろう。

最近では、全国各地で、実際には使わなくなった古い方言を用いた擬古的な文章が非常に多い。それらは、明治後半～大正頃生の方言の特色の一部を使ったものである。どの地方でも、この世代が、方言記録が様々な媒体に多量に残るようになる最初である。そして、この世代の方言は共通語化が著しくなる前で、各地域が持つイメージと結びつけやすく、使用によって表現効果をあげることができる。方言使用の表現効果に関する研究は数多い。

言うまでもなく、最近では京阪でもこの種の擬古的文章が多量に存在する。しかしネイティブでもこの世代の方言を聞いたことがない人が増えてきている。そのため本来その形式が使用されていた時期の方言としては様々な「誤り」が生じる。ノンネイティブの文章にはこの種の誤りが以前からあったが、最近ではネイティブの文章にも多い。書き手は表現効果に成功しさえすれば正確さは問題にしないのかもしれない。読者も誤りに気づいたり、それを指摘したりする人が少なくなっている(宮尾登美子 1996「京ことば」清水義範編『日本の名随筆 方言』作品社)。ともあれ誤りを分類して例をあげる。

- ①近接地域の有力方言の混入。実際に借用はしばしばあり、その場合は問題ないが、現実には借用されたことがないのに他地域の方言が使われている場合。
- ②馴染みのない形式のため意味用法や語形が誤っている場合。
- ③擬古的方言で書かれた文章の中に下の世代しか使わない新しい特徴や共通語形(後者は7.1とも重なる)が混入する場合。

以下は京都市内出身者が擬古方言として書いているものの中の例である。

①の例には、古めの大阪方言の混入が極めて多い。実際に借用されているものもあるが、それ以上に書かれたものに多量に見つかる。今では、大阪方言の勢力拡大によって、古めの大阪方言交じりが擬古的京都方言の文体として確立している。「こんな時節でおますのに」「そないな偉そうな店とちやいます」「着物にうるさい京都人もよ～けいてはる」。

②の例。「(座布団を勧めたが断られたので再度勧める) 何言うておすな」(テオスは「てあります」の意で、おそらく正しくは「何言うてやす(い)な」[尊敬のヤスの継続態]。「何言う」とい(ゐ)やす(い)な」も可)。「相談しておくれやす」(話し言葉ではシトクレヤス・シトクレヤスが普通。7.1の例でもある)。

③の例。「ぐつ悪おすねん」(= 2.1 節例文)「違うんどすえ」

このような擬古方言文体が、一定の幅を持ちながら、比較的安定したものとして今後も持続するのかどうか、興味が持たれる。

参考文献

- 庵功雄 (2000) 「教育文法に関する覚え書き」『一橋大学留学生センター紀要』3
- 榎垣実 (1948) 『京阪方言比較考 (温古志叢書第四編)』土俗趣味社
- 榎垣実 (1946, 49) 『京言葉』高桐書院
- 金沢裕之 (1991) 『二十世紀初頭の大阪口語の実態』科研報告書
- 金沢裕之 (1998a) 『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 金沢裕之 (1998b) 『初期落語 SP レコードの大阪アクセント』科研報告書
- 小杉孝二 (2003) 「大阪弁『ネン』の変遷」『地域言語』15
- 竹村明日香 (2009) 「ハル敬語の形態変化の通時的考察: 大阪・京都の比較を通して」『待兼山論叢文学篇』43
- 辻加代子 (2009) 『「ハル」敬語考——京都語の社会言語史』ひつじ書房
- 中井幸比古 (2008a) 「京のことば」1-10『東京新聞』(① 4/16 前書き、② 4/23 高浜虚子「風流懺法」以下3作品の京都弁、③ 4/30 同作品の版による京都弁の異同・修正過程、④ 5/14 長田幹彦の祇園物の京都弁、⑤ 5/21、⑥ 5/28、⑦ 6/4、⑧ 6/11、⑨ 6/18 大村しげの随筆の文体、⑩ 6/25)
- 中井幸比古 (2008b, 2009, 2010) 「京都方言の形態・文法・音韻」(1)-(3)『方言・音声研究』1, 2, 4
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法』4
- 野間純平 (2013) 「大阪方言におけるノダ相当表現」『阪大日本語研究』25
- 前田勇 (1949) 『大阪弁の研究』朝日新聞社
- 前田勇 (1965) 『上方語源辞典』東京堂出版
- 松丸真大 (1999) 「京都市方言における『のや』『ねん』の意味・用法の異同」『阪大社会言語学研究ノート』1
- 森山卓郎 (1994) 「京都市方言の丁寧融合型尊敬形式『お～やす』」『阪大日本語研究』6